

全国在宅療養支援診療所連絡会 第1回全国大会 プログラム別詳細

| | |
|----------|--|
| タイトル | 私にもできる!?在宅医療と地域づくり～つるカフェのころみ～ |
| 日時 | 平成26年3月23日(日) 14:50～15:50 |
| 会場 | サブホール(503) |
| 座長 | 鈴木央 (鈴木内科医院・連絡会副会長) |
| 演者 | 鶴岡優子 (つるかめ診療所・連絡会会員) |
| 企画の趣旨・概要 | <p>下野市は栃木県の南に位置し、人口は約6万人、大学病院として自治医大があり、獨協医大も近く、医療機関にも介護施設にも恵まれている地域である。つるかめ診療所は下野市にある在宅療養支援診療所で、スタッフは医師2名だけという小さな診療所である。3つの理念をもち、これを栃木の方言ダイジ(大丈夫という意味)にかけて、3つのダイジと呼んでいる。①「あなたの家で」をダイジにします。②多様な価値観をダイジにします。③仲間を増やすことをダイジにします。</p> <p>当院の地域連携は、すべて外部機関・他事業所との連携であり、医療機関はもちろんのこと、6ヶ所の訪問看護ステーションと、多くの居宅介護事業所、調剤薬局、介護施設と連携してきた。しかし、ケースごとのカンファレンスや指示書、メール、ファックスなどの文書のやりとりでは不十分と感じていた。2011年3月の震災を契機に、さらなるつながりを求めて、公民館の和室を借りて「つるカフェ」勉強会を開催した。その後も「顔が見える以上にお茶する関係」を合言葉に、定期的に無理なく楽しく活動している。テーマはさまざま、各職種の仕事内容を説明する「〇〇のオシゴト」はシリーズ化している。場所は公民館、道の駅、生涯学習情報センターなどの公共施設を借り、30名～60名集まった勉強会である。参加者のほとんどはケアマネジャー、訪問看護師、ヘルパー、薬剤師、地域包括支援センター職員、行政職員、病院職員など専門職である。講演もあればグループワークもあり、参加人数、会場、テーマによって勉強会スタイルを変えている。こだわりはお茶とスイーツを用意すること。つるカフェ店主の仕事は、①テーマを決めること②開催日時を決め場所をとること、これだけである。実行委員はその都度、テーマによって多事業所からメンバーを募り運営している。</p> <p>地域包括ケアには市民の参加と意識改革が欠かせない。つるカフェでは年に1回は市民講座を開くことを目標にしている。2012年は勇美記念財団で、2013年は地域社会振興財団で助成金をいただき、テーマはそれぞれ「家で最期まで生きる」「医療と暮らしに橋を架ける」であった。日頃のネットワークで集まった多職種のボランティアが緑色のTシャツを着て運営のすべてを行なった。会場は自治医大の大講堂、介護中の家族も、図書館でポスターをみた市民も、大学病院関係者も在宅ケア関係者も一堂に会した。専門職も職業人である前に地域に住む市民であることを自覚し、自分たちの地域に直面した現実と課題を共有することができ大変有意義な会であった。これらの小さな活動を継続することで、この地域の在宅ケアの質が向上し、さらには地域力の向上につながると信じている。</p> |

(敬称略)